

八王子の民俗ノート No.1

市内浅川地区の民俗調査をはじめました

民俗部会では『八王子市西南部地区 浅川の民俗』の刊行のため、平成25年(2013)は浅川地区で民俗調査を実施します。調査テーマと調査者については、9ページと10ページを参照してください。よろしくお願いいたします。

八王子市市史編さんでの、民俗関係図書の刊行予定

1 地区別民俗調査報告書<5地域、5冊刊行予定>

新八王子市史民俗調査報告書 第1集	八王子市西部地域	恩方の民俗	(平成24年3月発行)
新八王子市史民俗調査報告書 第2集	八王子市東部地域	由木の民俗	(平成25年3月発行)
新八王子市史民俗調査報告書 第3集	八王子市西南部地域	浅川の民俗	
新八王子市史民俗調査報告書 第4集	八王子市北部地域	加住の民俗	
新八王子市史民俗調査報告書 第5集	八王子市中央地域	旧市街地の民俗	

2 叢書『聞き書きによる八王子の織物』(仮称)

八王子まつり・民俗芸能・民家などのテーマ別調査と民俗資料の集積を行うとともに、従来からの研究資料の収集とその有効活用を図るため冊子にまとめます。最初は、八王子の織物について刊行する予定です。

3 民俗写真集

市民生活が写された画像資料の収集とこれに基づく調査から、昭和30年代の写真を中心として、既刊の出版物に掲載されている写真や、市民の皆さんがお持ちの写真などをご提供いただいてまとめる予定です。

4 新八王子市史 民俗編 平成28年度(2016年度)刊行予定

【よくある質問】

八王子市は10の市町村が合併して構成されています。10地区10冊の民俗誌を刊行しないのですか？

確かに八王子市は、昭和16年(1941)に小宮町、昭和30年(1955)に横山村・元八王子村・恩方村・川口村・加住村・由井村、昭和34年(1959)に浅川町、昭和39年(1964)に由木村を合併しました。旧市町村の行政区画は地域の一体化を育み、その地域で共有する歴史や文化を保持し、一定の力を発揮してきました。しかし、合併以降の地域変動も大きく、八王子市の人口は昭和40年(1965)に201,968人、平成24年(2012)には555,630人で、47年間に2.8倍の人口規模となり、人口構成や産業構造、市民の地域意識も大きく変わってきています。こうした状況と、市制100周年までの限られた編さん期間内に実施できる調査活動を想定し、地区別民俗調査を計画しました。

これからの八王子市政の基礎資料となるよう、地域の歴史や伝統文化に今日的課題も加味し、本市の『新基本計画』の地域区分を調査地域選定の基礎としました。具体的には山地をかかえる西部地域と西南部地域、丘陵の北部地域と東部地域、江戸時代から都市として発展してきた旧市街地の中央地域、この5地域を民俗調査の対象地域としました。

八王子の酪農について

専門管理官 佐藤 広

1 酪農へのまなざし

市史編さん室は八王子市寺田町の旧稻荷山小学校の2階に事務室がある。職場の北側の窓からは市街地のはるか彼方に時には筑波山が、眼下には谷戸に沿った寺田の集落を俯瞰することができる。ここ寺田町に酪農を営む農家がある。また、八王子市斎場東の交差点の付近では、道路の南側に綿羊や乳牛を見ることがもできる。そこは磯沼ミルクファームの牧場の一部である。

今日でも酪農に触れることのできる八王子市、その八王子市での酪農の歴史は、地域を理解するうえで欠かすことができない農業の一つである。まず、市内松木の井草甫三郎（いぐさ ほさぶろう）(1)が、多摩地域で最初に乳牛を導入し、南多摩における牛乳の生産とその組織(2)を立ち上げたことは特筆に値する事柄である。なぜ、井草甫三郎が逸早く酪農をはじめたのか、また、首都東京と郊外の八王子市の都市化と酪農はどのように関連し、市民の暮らしとどう関係してきたのか、どのように酪農の経営形態が変遷して現在に至ったのか、酪農家の暮らしはどうであったのか、酪農の今日的意義は等々、様々な課題が浮かんでくる。

市内で酪農についての話を聞くことによって、八王子の農山村地域における酪農の重要性を実感させられた。そこで、この覚書が前述したような課題を解く端緒となればと思い、ここにまとめてみた。

2 民俗調査などから

事例1 八王子市小津町

小津町のある家では、先代が昭和7～8年ころから酪農をはじめた。当家の先代は、南多摩で初めて酪農をはじめた由木村（市内由木地区）の井草牧場や鈴木牧場と一緒に酪農を始めた仲間であった。牛は井草牧場から持ってきたという。小津町ではもちろん最初であったが、その後ほかの家も酪農を始め四軒ほどで行われていた。先代はその後召集になり、その間妹たちに牛の世話を頼んで出征したという。以来、平成になるころまで牛乳を出荷していた。

昭和二十年代、牛一頭を買うのは畑一反と同じだった。だから誰でも買えたわけではなかったが、当家では一番多かったときには牛舎で十頭くらい飼っていた。種類はホルスタイン種だった。酪農関係の施設は屋敷続きの敷地内にあり、牛舎、サイロ二つ、放牧場（20～30坪）などがあつた。

搾乳は一日二回、夜と朝に行う。それを朝六時半か七時くらいには牛乳屋が取りに来るので、それまでに朝の搾乳を終わらせる。この家では昭和24年ころ、アメリカ製の搾乳機を導入した。このあたりでも早い方だったが、当時は電圧が低くて停電が多くて苦勞した。

集乳は、最初は小田野の集乳所へ持って行った。その後、付近の四軒で搾ったものを当家へ持ってきて、それをタマラク（多摩酪）が集めに来てここから持っていくようになった。メイトー（名糖）という牛乳屋も集乳に来たように思う。タマラクとは、「多摩酪農農業協同組合」といい、八王子の子安にあつた。酪農でいう農協のようなものだった。

牛の餌は、夏と冬で少し違う。夏は、大豆・フスマ・ワラ（稲藁などを干したもの）・配合飼料・牧草など。冬場の餌には、牧草の代わりにサイレージを与える。サイロが二つあり、夏にトウモロコシや牧草を刈って入れ、サイレージを作った。牧草の種類はケンタッキーグラスなどである。タマラクから飼料を買うこともあつた。

乳の出なくなった牛やヤギは、元八王子町の肉屋が取りにきた。

当時辺名に住んでいた作家のきだみのるは、牛乳は飲まないが、牛乳を放っておいて固まってヨーグルト状になったものを好んで飲んでいて、よくそれを取りに来たものである。(3)

事例2 八王子市西寺方町

戦前はみんな農家で現金収入は養蚕で得ていた。戦後は養蚕が駄目になったので個人で三、四頭の牛を飼う酪農に移り、多少のお金が入った。自家で絞って乳を集乳所に持って行ったが、そのうち個人のもは取らないということになり、大きくやる所を除いてみんな止めてしまった。(4)

事例3 八王子市裏高尾町

生業は山林経営と農業であった。養蚕、まき山、炭焼きなどをやっていた。畑は4反、水田は1反歩あった。そのころ山仕事では暮らしが続かないし、中央線の複線化がはじまり、農地は鉄道用地となるので農地が無くなってしまふので酪農をやろうとした。30軒くらいで多摩酪農農業協同組合を組織した。(5)

事例4 八王子市散田町

野菜をつくっていても、たくさんできれば値が下がってしまい、暮らしもなかなか安定しなかった。弟が教員をしていたので相談し、幼稚園の経営を考え、視察などをしていた。ある幼稚園に行くと、園児が転んで亡くなった事故があったのを聞いて、幼稚園経営は断念した。よそに仕事に行くのは好まなかったもので、何か地元でやりたいと考えていた。

小学校給食でミルクが出るようになり、子どもたちは成長してもミルクは飲むものと考えた。そこでチチウシ(乳牛)を購入し、父親がまだ健在のころには、牛に子を産ませて販売することもやっていた。乳牛は、町田市相原の小林さん、山梨の長田さん、八王子市谷野町の人など、博労が扱っていた。乳牛の飼育の仕方は、母親の従兄弟が嫁に行った由井村の中島さん宅に行き指導していただいた。乳の搾り方も変わり、手絞りから搾乳器へと変わった。

物置の跡をつかって屋敷の中で酪農をやっていたが、次第に屋敷内では手狭になり、農協の融資を受けて牛舎を散田小学校の前に新築した。乳牛の数が多いたときには20頭くらい飼っていた。酪農は昭和40年代まで行っていた。さらに牛舎を作って酪農を続けようと考えていたが、小学校ができて近隣から“臭い”といわれるようになった。わが子も学校に行くので、子供の立場の心配をし、酪農はやめることにした。(6)

事例5 八王子市横山地区

多摩酪農農業協同組合の事業に力を入れて働いてくれたのは、由木村松木の井草甫三郎氏を中心に各村の先輩諸氏であった。旧横山村では狭間部落で昭和12、3年頃始め、皆熱心に行き居た。昭和14、5年頃大巻部落、館東部、大船、寺田数名で始められた。寺田では串田庄一氏が一番で私が二番、昭和17年4月より始めた。牛も順調にて、乳量も増し、進んで行ったが、昭和19年4月末召集令状来たり、残念ながら国の為、一時牛を売って出征した。3、4日間の内に牛を売るので実に骨折った。此の牛乳は八王子工場まで村人が交代にてリヤカーで運んだ。

終戦後は昭和23年再び酪農が始まった。段々仲間も増して、二間在家部落山口幸雄氏が、オート三輪車で運んでくれた。

昭和26、7年頃、寺田下端田所為一氏所有地に集乳所を作り、此の頃より増々隆盛になった。昭和34、5年頃、中寺田の山本清一氏所有地に集乳所を作った。館方面は大巻部落の八木菊雄氏所有地に作った。二ヶ所共冷却装置の集乳所で現在も使用している。

私も昭和43年まで続けたが、手不足と健康状態により、残念ながら止めてしまった。

名は酪農(らくのう)であるが、体についてはなかなか苦農の仕事である。相手が動物なる故に、粗飼料色々で、牛の病気の時は一夜牛舎で明かす時もあり、組合獣医の先生諸氏には、実に御厄介になった。仲間諸氏にも非常にお世話になって感謝して居る。(7)

以上、聞き書きと澤田鶴吉氏の記録から、酪農は市内で90年以上前の昭和はじめから行われていたこと、暮らしの安定を求め戦後は養蚕から酪農へと転換したこと、小学校でのミルク給食をはじめ食生活の洋風化を踏まえての酪農経営が行われてきたこと、農家近くまで及んだ宅地化によって酪農を取りやめる例があったことや、乳牛の飼育技術の伝播、酪農家で協働しての牛乳の出荷、組合の組織化などを知ることができる。

こうしてみると、酪農にかかわる牛舎・サイロ・放牧場などの飼育施設、様々な機械や用具、搾乳方法、出荷方法、博労と乳牛の入手方法、飼料とする草木の栽培、牛乳と乳牛の管理、乳牛の糞尿の処理や利用など、酪農文化といっても良いだろう。井草甫三郎の乳牛の導入時期を明治40年(1907)とすると、今年の、平成25年(2013)は、八王子市の酪農の歴史は106年となる。

3 都市化・欧米化の暮らしと酪農

明治維新以降の日本の近代化によって都心部ではじめられた酪農が、首都東京の都市化で千葉や多摩の郊外に移り、都市部の人口増加と食生活の欧米化のなかで酪農が展開する。やがて郊外でも宅地化が進展して酪農そのものの経営危機が訪れる。

そうした都市化と酪農の課題が最も鮮明に表れたのが、多摩ニュータウン開発事業で生じた八王子市堀之内の酪農家を中心とした多摩ニュータウン建設反対運動であろう。そこでは酪農をはじめとする地域農業の今日的意義や、都市開発のあり方、あらたな地域社会づくりが問われている。(8)

八王子市は周辺市町村を合併することによって、東京都でも有数の酪農地域となってきた。そして、酪農は都市農業や里山が見直されるなかで、酪農を超えて私たちに現代的な課題を提示している。

【註】文献紹介の意味も込めて参考のために記したので、長文の註となった。

(1) 井草甫三郎については、『郷土を築いた人たち』(読売新聞八王子支局 1952)では「酪農の開祖井草甫三郎」(23頁~26頁)と題して紹介している。これによると井草甫三郎は、昭和26年1月8日没。「東京立志塾で村田直景に師事、農村経営の法を学んでから窮乏農村再興は『酪農経営』との信念をかため明治25年先進酪農地千葉県房総地方を視察、ホルスタイン種牝牛一頭を買い込んだのが都下最初の乳牛で、酪農三多摩のスタートラインとなった」と酪農導入の理由や時期について述べ、現在下柚木の永林寺にある「牛魂碑」が、昭和25年4月15日に堀之内日蓮堂に建立されたことを記載している。

『郷土を築いた人たち』の装幀は洋画家の小島善太郎、扉絵は日本画家の川合玉堂、序文の「出版によせて郷土の先人を讃う」は作家の吉川栄治と、当時の多摩地域に住む著名な文化人が名を連ねる。多摩地域の30名と1団体(横山党)が紹介されている。八王子では、横山党、長田作左衛門、平林定兵衛、井草甫三郎、豊泉信太郎、横川うめ、谷合為政、萩原彦七、原善助、設楽左衛門、河井宗兵衛の10名と1団体が扱われている。

『私たちの郷土由木村』(小倉英明 1961)には、「資料47 由木の酪農—井草甫三郎 井草氏は由木村松木に生まれ、東京立志塾で農業経営を学び、農村の復興は酪農経営以外にないと考え明治25年、房州を視察してホルスタイン種の牝牛1頭を買い入れて飼育を始めた。これが三多摩酪農の出発であった。

その後、酪農組合の設立、酪農の得策を説いてまわり、現在の隆盛の基を作った。明治40年8月には第八代の大正14年には第十五代の村長となり村政にも大きな貢献をした。昭和13年、高松宮へ牛乳を献上、銀の花瓶を下賜された」とある。

『町田市史』下巻(町田市 1976)では「大正・昭和 第1章 大正時代の町田 四 多摩酪農組合の歩

み」で、「酪農業の導入 牛小作 組合の設立 牛乳販売とバター製造 牛乳の共同処理事業 壘装殺菌乳の販売 多摩酪農業発達史（年表 明治40年から昭和16年まで）」が掲載されている。酪農導入の理由について、「当時、井草氏は酪農業に対して、無限に生産できる草により乳牛を飼い、その糞尿を土地に施し、農産物を増産するとともに人類最高の食品である牛乳を生産する酪農こそ家や村を興し、国家永遠の繁栄の基であるとの確信をもっていったという」と述べている。

『由木 潤いと安らぎの活きづく街一ゆぎ 由木土地区画整理事業誌』（東京都多摩都市整備本部南多摩区画整理事務所 1997）の「1-2 由木の歴史」の中に、「農村経営の先覚者、三多摩初の酪農に取り組む」で井草甫三郎が取り上げられ、「井草氏は、窮乏する農村の振興のためには『酪農経営』との信念をかため、酪農の先進地を視察し、ホルスタイン種牝牛1頭を買い <中略> 井草氏の構想は単に畜産の奨励ということではなく、当時の自由民権壮士が、政治に熱中して農業をすて、離村する傾向を憂い、政治と農村を密着させ、農村指導者を育成するものでした」と述べている。

仲宇佐達也の『東京農業史』（けやき出版 2003）では、「第12章 東京牛乳事情（1 牛乳搾取業事始め 市乳の開祖前田留吉 明治初めの牛乳PR 2 阪川牛乳店と和田牛乳店 我が国最古の阪川牛乳店と初代の阪川当晴 和田牛乳店と初代店主和田半次郎 3 結核牛事件とミルクプラント 衛生管理の強化と組合の結成 結核牛事件とミルクプラントの設立 4 多摩酪農組合の歩み 多摩酪農家の乳牛導入 戦後の多摩酪農農業協同組合 5 乳牛関係の統計）」と酪農関係の記載があり、「4 多摩酪農組合の歩み 多摩農家の乳牛導入」で井草甫三郎に触れ、彼が北海道や千葉から牧草の種子を買い入れ栽培したこと、農家へ牛を貸し付けることを行い飼育管理の指導を行ったことを記載している。なお、井草甫三郎の酪農導入の考え方は、『由木 潤いと安らぎの活きづく街一ゆぎ 由木土地区画整理事業誌』の記述を踏襲している。

JA 東京中央会企画・発行『江戸・東京 暮らしを支えた動物たち』（農山漁村文化協会発売 1996）は「第I章 家畜からみる江戸・東京の歴史 第II章 東京から広がった乳肉卵食と畜産 第III章 乳・肉・卵の生産技術の発展—東京畜産の力 第IV章 人と動物と環境の調和」の4章で構成され、「II章 8 東京湾ミルクロードと多摩ミルクロード」に「シルクロードはミルクロード」の項があり、井草甫三郎とその子の井草市郎、市郎の実弟の正について触れている。

なお、乳牛の導入時期については、『郷土を築いた人たち』、『私たちの郷土由木村』、『由木 潤いと安らぎの活きづく街一ゆぎ 由木土地区画整理事業誌』、『江戸・東京 暮らしを支えた動物たち』が明治25年、『東京農業史』と『町田市史』下巻は明治40年としている。ここは明らかにしたい点である。

『八王子市史』上巻（八王子市役所 1963）では、酪農について「第5章 農業 第2節 畜産業 1 本市畜産業の概況」が掲載され、乳牛についての記載は次のような内容である。昭和25年当時酪農家は5戸、飼育頭数は17頭、昭和26年の都有乳牛の貸付実施や昭和27年の市有乳牛の貸付等の奨励政策で、昭和29年には乳牛頭数が55頭になった。昭和30年の6か村（横山・元八王子・恩方・川口・加住・由井村）合併で八王子市の乳牛は568頭となり、都下有数の酪農地域になった<要約>、と記されている。

井草甫三郎の生まれた南多摩郡由木村は、昭和39年に八王子市に合併した。『八王子市史』上巻の刊行は由木村合併以前のことであり、井草甫三郎については触れられていない。

（2）東京府『東京府史』行政篇 第2巻（1935）の「第3 畜産業 第2章 牛 2 牛乳組合及び畜牛組合」に、次のように記載されている。

「南多摩郡由木村では、大正7年10月6日畜産講話会を開催し、府庁からも技師を出張せしめた。当時同村に於いては畜産組合の必要を感じてはいたが、その範囲は一村を区域とする組合であったから、設立許可の困難なるべきを慮っていた。時恰も右技師の出張があったのを好機として設立許可を懇願した。技師もその趣旨を諒として農商務省にその事情を具陳して許可の内諾を得、これを由木村の有志井草甫三郎氏に通じ

た。茲において由木村では井草氏の外、青木・田倉・平方・松岡の諸氏が発起人となって案を作り、同8年12月13日申請書を提出した。然るに時の南多摩郡長内山田三郎氏は、一村の畜産組合組織よりも一郡の組合を設立す可きであるとの見地から勧誘に努め、その結果全郡一致を以て南多摩郡畜牛畜産組合を設立するに決し、一切の手続を経て大正9年2月20日南多摩郡畜牛畜産組合設立の認可を受け、同年4月より事業に着手し、組合長に内山田郡長を、副組合長に井草甫三郎氏を推薦して、畜牛の増殖・家畜の衛生・講習講話会並びに品評会の開催等に全力を傾倒した。現在組合内には約七百頭の畜牛を有し、組合としては牛乳の改良増殖を行うため国有種牡牛・府有牡牛の貸下を受け、これを組合で管理して種付に供用し、又一方政府の奨励金を受けて三頭の種牡牛を購入している。

尚昭和2年には有限責任南多摩郡牛乳販売組合を組織し、昭和2年度及び3年度に政府の奨励金約式萬円を受け、共同搾乳所二十ヶ所、共同処理所四ヶ所を設置し、次いで同4年度及び5年度に約式萬円の奨励金を受け八王子市子安町に中央処理所を設置して、生産した牛乳を処理することとしている」（629頁9行目から630頁13行目まで）。

(3) 神かほり「第3章 生産・生業 五畜産業 酪農」『八王子市西部地域 恩方の民俗』（新八王子市史民俗調査報告書 第1集）八王子市総合政策部市史編さん室 2012

(4) 加藤隆志「第2章 社会生活 三 下小田野 かつての農業」『八王子市西部地域 恩方の民俗』（新八王子市史民俗調査報告書 第1集）八王子市総合政策部市史編さん室 2012

(5) 市内裏高尾町の峰尾幸雄氏からの聞き書き。2011年4月に、古文書調査の折に大木悠佑市史編さん専門員が同行した際に聞き書きした。

(6) 市内散田町の谷合良一氏からの聞き書き。散田町の「ふるさと歴史の会」の澤本宣男氏、大井英二氏にご紹介いただき、2011年1月に聞き書きにもご同行いただいた。

(7) 澤田鶴吉「酪農」『寺田の百姓』ふだん記新書12 ふだん記全国グループ 1975

この引用した文章の後には「牛飼い物語」と題して、大正年間の若夫婦の農家の暮らしを記載している。

(8) こうした課題は、岡田航の「堀之内の里山ボランティア活動史」（『多摩ニュータウン研究』No.14 多摩ニュータウン学会 2012）にまとめられている。著者の岡田航は東京大学新領域創成科学研究科修士課程在学中で、この稿は2008年9月から堀之内の里山ボランティア活動の参与観察や、住民からの聞き取り調査を行ったその成果をまとめたものである。八王子市堀之内地区では里山ボランティア活動が盛んで、それを多摩ニュータウン建設の反対運動、とりわけ酪農家の主体的な運動の把握から経過を踏まえ論述している。里山ボランティアは住民たちのより良い暮らしを求める思いの“かたち”の一つであり、里山研究は「都市開発と住民との関係や、地域計画のあり方まで視野を広げて研究することができる可能性とヒントがある」と指摘している。今後の研究に注目したい。これは酪農の文献ではないが、八王子の酪農に関係する文献として取りあげた。

この稿の註には、井原満明「酪農・養蚕と共存するまちづくり活動」（山岡義典編『NPO基礎講座3』ぎょうせい）1999、大石湛山「大都市居住環境保全と都市市民運動 多摩ニュータウン開発における酪農問題に発する都市と農村の諸関係」（『総合都市研究』13；79-127 東京都立大学都市研究所 1981）、林浩一郎「多摩ニュータウン開発の情景—実験都市の迷走とある生活再建者の苦闘—」（『地域社会学会年報』20；59-74 2008）、ユギ・ファーマーズクラブ編『『農』はいつでもワンダーランド』学陽書房 1994などが示されている。また、UR都市機構『多摩ニュータウン開発事業誌 市域編Ⅱ』2008 には、「第2章 1 9住区 第2節 マスタープラン (2) 酪農問題と事業継承 / 第5節 事業調整等 1 酪農問題 (1) 経緯 (2) 土地収用」がある。

<参考>

東京府『東京府史』行政篇 第2巻 昭和10年（1935）から（本文は縦書き）

（1）第3 畜産業 第2章 牛 1 本府の畜牛（611頁から）

本府の畜産中最も盛んなものは畜牛である。明治維新後政府が畜産に意を注いで、各種の奨励施設を行ったことは総説に述べた所であるが、本府に於いて最も重きを置いたのは畜牛であった。当時東京は政治の中心であると同時に産業的にも指導的地位におかれてあったので、輸入牛の多くは一時東京に集まり、ここから地方に移出される状態であった。

明治10年の頃、府下牧場で牛を飼育したものに開拓使牧場（麻布新筈町）、勸農局試験場（内藤新宿）、勸農局農学校（駒場）及び細川潤次郎氏牧場（小石川戸崎町）があり、何れも内国種よりも洋種を多く飼育していた。これをみてもその頃如何に洋種の輸入が盛んに行はれていたかがわかる。

明治21年の農務局畜産掛の調査によれば、明治初年から同21年迄の間に、東京府下では488頭の洋牛が民間で輸入されている。（←611頁）

<中略>

かくの如くして、明治初年から同21年迄の間に、全国に輸入された外国種623頭の内、その大部分即ち520頭は東京府下に繋留された。この東京府下に輸入された洋牛の多くは牝牛であって、その数は494頭に及び、牡牛は僅に26頭であった。

その後民間に於けるものは勿論、政府に於ける洋牛輸入の状態は全く不明で、本府自身の施設も大正6年に至るまでは全く見るべきものがなかった。然るに大正6年9月の大暴風雨が機縁となって再び畜産奨励に意を注ぐに至ったことは既に総説に於いて述べたところである。（←614頁4行目から11行目まで）

<以下略>

（2）二 牛乳組合及び畜牛組合（619頁から）

東京府下に於ける畜牛の沿革及び現況を知るには、各種畜産組合の業績を検討するのが捷徑である。

東京府畜産聯合会の前身とも云うべきものは東京牛乳畜産組合で、同組合は大正4年1月13日発布の畜産組合法及び同年7月31日の同法施行規則に依って、大正5年1月15日、旧東京搾取業同業組合の役員会に於いて組織を決議し、同年11月25日設立認可を申請、翌6年3月13日認可、次いで4月13日赤坂区溜池町三会堂に創立総会を開き、設立準備委員長中澤惣次郎氏司会の下に、出席者308名で、定款・予算の議決、役員選挙等諸般の手續を了し、始めて完全に成立したのである（619頁5行目まで）。

<中略>

1組合の区域 同組合は東京・荏原・豊多摩・北多摩・南葛飾の1市5郡以て区域と定め、事務統制の便宜上定款によって左の7支部に区分している。城南・新宿・北豊島・巣鴨・城北・江東・江南の各支部（619頁10行目から13行目まで）

多摩酪農農業協同組合の獣医師、清水徳雄氏聞き書き

八王子市内にお住いの清水徳雄（しみず とくお）さんに、平成24（2012）年2月9日（木）と16日（木）の午前に聞き書きした。以下はその報告である。

清水さんは昭和8（1933）年生まれで、山梨県中巨摩郡出身とのこと。学校法人麻布獣医学園⁽¹⁾を卒業し獣医師となった。仕事は、はじめは農業共済組合に就職した。昭和40（1965）年に多摩酪農農業協同組合⁽²⁾に入り、同組合が解散する平成10（1998）年まで勤務した。組合に入った当時の組合長は、井草市郎さんであった。

多摩酪で 組合にはすでに先輩の獣医師が2名勤務しており、獣医師としては臨床が専門で、地域をそれぞれ区分けして受持ち、清水さんは多摩市、町田市の南部、横浜市瀬谷区あたりを担当した。昭和40年代の半ばころ（1970年ころ）までは多摩地域では酪農が盛んであった。

農家から組合に電話が入ると、獣医師は乗用車で農家まで出かけた。車のトランクには診療のための道具を積んでいた。自分では経験しなかったが先輩たちの話によると、昭和30年代（1955～1964年）に牛の流感がはやり、多忙を極めたことがあったという。

牛の病気 牛のよくある病気には、第一胃食滞があった。牛は反芻動物なので、第一胃から第四胃までの四つの胃を持っている。その第一胃には多くの微生物が住んでいて、食べたものを胃の中で発酵させて栄養素に変えてから体内に取り込む。だから、食べすぎで胃が動かなくなってしまうことがある。そして、胃にガスがたまると胃が膨れて横隔膜が上がり、肺が圧迫されて呼吸困難に陥る。牛舎の中で大きな牛がひっくり返ってしまうことがある。

治療は牛の体の左側に第一胃があるから、そこに直接穴をあける。トウカンシン（針）という器具を牛のおなかに差し込む。これを差しておいてこの器具の鞘（さや）を抜くと牛の胃の中のガスが抜ける。こうした病気は、時には夜間に農家から呼びだされることもある。

急性コチウ症という病気や怪我で亡くなった牛、難産で亡くなった牛は、昭和40年代には法律からしても屠場へ持ち込むことが可能であった。つまり、この場合には乳牛ではあるが食肉として販売することができた。

牛の出産 獣医師が牛の肛門に手を挿入することがあるが、これは肛門の下部に膣があり、その下に子宮がある。種付けの場合には、手を入れて直接卵巣を確認する。

一番対応が大変なのは、難産の場合であった。牛によって一頭ごとにお産のかたちは違う。産道から体外へ出る仔牛の姿勢は、一番良いのが二本の前足の上に頭を置いた姿勢である。逆子のように出産しやすい姿勢になっていない場合が多い。その時には膣からロープを持って子宮の中に手を入れ、子宮内の仔牛の姿勢を正常にした。それから、仔牛の前足に先端を輪にしたロープをかけ、農家の方にも手を貸してもらって仔牛を母牛の体内から引き出すこともあった。牛を育てている農家の人は、牛が破水してはじめて出産時期に気付くので、急に呼び出される場合が多かった。帝王切開での出産は最初のころはなかった。

牛乳の生産 昭和40年代の牛乳の消費は、夏季に多かった。したがって、出産してから三か月後くらいで乳牛の乳量が多くなるので、それに合わせて冬場の出産が多かった。こうした出産にあたる獣医師は、大量の羊水や糞を浴びてしまうので、裸になって医師用の前掛け一枚をつけての姿で対応した。出産が終わったら、入って下さいとお風呂を用意してくれた農家もあった。昭和30年代には、牝（めす）の仔牛が生まれると、獣医師を交えて一杯やることもあったと聞いた。（話者 清水徳雄氏 文 佐藤 広）

【註】

(1) 学校法人麻布獣医学園 明治 23 (1890) 年に與藏車隆が東京市麻布区に東京獣医講習所を開設。太平洋戦争の戦災で校舎を焼失し、昭和 22 (1947) 年に相模原市中央区淵野辺の現在地に移転する。昭和 25 (1950) 年に麻布獣医科大学として開学、昭和 26 (1951) 年には財団法人から学校法人に変更し、学校法人麻布獣医学園となる。昭和 32 (1957) 年 4 月に、獣医学部獣医学専攻科を開設。現在は麻布大学。

(2) 多摩酪農農業協同組合 多摩酪と一般にいう。井草甫三郎は大正 7 年 10 月に、由木村で畜牛講習会を開き、それをきっかけに大正 9 年 3 月、南多摩郡畜牛畜産組合を結成した。昭和 2 年には南多摩郡牛乳販売組合を設立。戦後の昭和 23 年に多摩酪農農業協同組合を発足、甫三郎の子である井草市郎が組合長に就任。平成 8 年、東京都の西多摩酪農業・全多摩酪農農業・都西酪農農業協同組合が合併し、東京都酪農農業協同組合を設立、後に多摩酪農農業協同組合、八南酪農農業協同組合の組合員とそのほかの酪農家加わる。多摩酪は平成 10 年に解散する。

なお、一部の資料で井草甫三郎を「いぐさ としさぶろう」と読ませているものがあるが、井草家に確認したところ「いぐさ ほさぶろう」である。

参考文献など：麻布大学ホームページ 仲宇佐達也『東京農業史』けやき出版 2003 年

市制 100 周年記念事業

平成 28 年 (2016) 度まで

八王子市市史編さん

民俗調査のお願い

八王子市は、大正 6 年 (1917) に市制を施行しました。そこで、市制 100 周年記念事業として『新八王子市史』の編さんをすすめています。将来の八王子市を展望するためには、先人の残した貴重な資料を保存し、活用できる環境を整備する必要があります。

今日、八王子市は大きく変貌しています。そこで、市内の伝統的な生活文化を聞き取り、文字で記録して後世に残すため、八王子市市史編集専門部会の民俗部会で地域の民俗調査を実施しています。何卒、ご協力のほどよろしくお願い申し上げます。

◆民俗調査の内容◆

地域に伝わる次のような伝統的な生活文化を調べます

1. **社会生活** 地域の範囲と区分、家数の変化、町会活動、親分子分、共同の仕事、屋号、こども組、冠婚葬祭、青年団、消防団、コミュニティ活動など
2. **生産・生業** 農作業、山・田・畑の仕事、目籠作り、養蚕、機織、畜産、職人などの生業
3. **住まいと環境** 民家、集落の立地と屋敷、水の利用、カマド、ヒジロ、風呂、便所のことなど
4. **衣食をめぐる暮らし** 衣料の調達、仕事着、ふだん着、食料の調達、食事の仕方、主食、副食、間食、調味料、茶と酒、行事の食べ物など



上恩方町での聞き取り調査 (平成 22 年)

5. 年中行事 正月の準備、正月、春・夏・秋・冬の行事など
6. 人生儀礼 誕生と育児、結婚と結婚式、葬式、墓制など
7. 寺社と民間信仰 寺院について（歴史・住職・寺の行事、檀家・墓地・葬儀・境内の神仏など）、氏神と氏子、神職、お日待ち、講、地域や家々で祀る神仏、民間信仰など
8. 民俗芸能 獅子舞、盆踊り、娯楽・芸能、子供の遊びなど
9. 口承文芸 昔の話、伝説、世間話、俗信、わらべうた、民謡など

◆暮らしの写真調査◆

八王子市市史編集専門部会民俗部会では上記の聞き取り調査のほか、昭和30年代ころ撮影の、むかしからの暮らしぶりを写した写真を集めています。また、その写真に関する聞き取り調査も行います。

これらの調査のために、市史編さんにかかわっている研究者や、市史編さん室の職員が、みなさまのお宅にお伺いする場合があります。ぜひご協力をお願いいたします。もしご不明な点がある場合には、お手数ですが市史編さん室にご一報ください。

◆八王子市市史編集専門部会民俗部会のメンバー◆

- | | | |
|-----------|------------------|-----------------------------------|
| 1. 部会長 | 小川 直之（おかわ なおゆき） | 國學院大學教授 |
| 2. 副部会長 | 津山 正幹（つやま せいかん） | 八王子市文化財保護審議会委員 |
| 3. 部会委員 | 小野寺 節子（おのでら せつこ） | 國學院大學兼任講師・
東京都文化財保護審議会委員 |
| 4. 部会委員 | 加藤 隆志（かとう たかし） | 相模原市立博物館学芸員 |
| 5. 部会委員 | 入江 英弥（いりえ ひでや） | 國學院大學兼任講師 |
| 6. 部会委員 | 宮本 八恵子（みやもと やえこ） | 日本民具学会会員 |
| 7. 専門調査員 | 大藪 裕子（おおやぶ ゆうこ） | 東村山ふるさと歴史館学芸員 |
| 8. 専門調査員 | 神 かほり（じん かほり） | 日本民具学会会員 |
| 9. 専門調査員 | 美甘 由紀子（みかも ゆきこ） | 八王子市郷土資料館学芸員 |
| 10. 専門調査員 | 乾 賢太郎（いぬい けんたろう） | パルテノン多摩歴史ミュージアム学芸員 |
| 11. 専門調査員 | 高久 舞（たかひさ まい） | 國學院大學研究開発機構研究開発推進
センター ポスドク研究員 |
| 12. 専門調査員 | 三代 綾（みしろ あや） | 國學院大學大学院生 |

このほか、八王子市市史編さん室の職員が調査協力をお願いしたり、行事を拝見させていただいたり、資料を拝借しに伺ったりすることもございます。

<問い合わせ先>八王子市総合政策部 **市史編さん室**

〒193-0943 八王子市寺田町1455番地3

電話 042-666-1511 / FAX 042-666-1512

E-mail b015200@city.hachioji.tokyo.jp

ホームページ <http://www.city.hachioji.tokyo.jp/seisaku/13570/index.html>